

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月17日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531018

研究課題名（和文）地域に残る口承文化の教材化にかかわる研究

研究課題名（英文）The study that the teaching materials of the oral tradition culture

研究代表者

小山 茂喜 (KOYAMA SHIGEKI)

信州大学・全学教育機構・教授

研究者番号：10452145

研究成果の概要（和文）：アンケート調査から、教師自身が地域情報について疎いことから、口承文化の扱いは高いとはいえ、授業設計における教師の意思決定が課題であることが明らかになった。教育実践等の分析から、地名や祭りことわざや昔話は取り上げられているが、農事にまつわる口承等については、ほとんど取り上げられていないということが明らかになった。東日本大震災を受け、先人の知恵を継承する防災教育視点から指導計画や研修教材とweb教材データベースを開発し公開した。

研究成果の概要（英文）：Because a teacher did not know the school district area information according to the questionnaire result in detail, so that oral tradition culture was not learned at school. As a result of educational practice analysis, the teacher teaches it about the place name, a festival, a proverb, the local old tale. However, the teacher hardly teaches it about the agricultural oral tradition. As for us, the teaching materials in succession to wisdom of the disaster prevention of ancient people developed East Japan great earthquake disaster for a lesson. In addition, We developed web teaching materials database, and we showed it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教材開発

1. 研究開始当初の背景

教育基本法の第一章第二条の五で伝統文化にかかわる内容が明文化された

ことを受けて、平成20年告示の小学校学習指導要領「社会」では、第3.4学年の内容(5)で、「地域の人々の生活の

向上に尽くした先人の働きや苦心を考
える」学習において、「地域の人々が受
け継いできた文化財や年中行事」を扱
うことが、「指導計画の作成と内容の取
扱い」においては「地域の実態を生か
し、児童が興味・関心をもって学習に
取り組めるようにするとともに、観察
や調査・見学などの体験的な活動やそ
れに基づく表現活動の一層の充実を図
ること」と「身近な地域及び国土の遺
跡や文化財などの観察や調査を取り入
れるようにすること」が示され、これ
までの単に地域に残る有形な文化財を
扱う学習から、地域で受け継がれてき
ている無形の伝承的な文化財にも焦点
を当て、地域の伝統を考えていくこと
の重要性が示された。

同時に中学校学習指導要領「社会」
の歴史的分野では、「受け継がれてきた
伝統や文化への関心を高め」る内容が
新たに加わった。

2. 研究の目的

小学校並びに中学校「社会」の学習
における伝統文化の扱いについてのこ
れまでの授業実践の問題点を明確にし、
平成19・20年度文部科学省委託事
業「伝統・文化等教材開発事業」で開
発した「地域に残る農業にかかわる祭
りや習わし」における教材開発を発展
させ、地域に残る「口承文化の伝承」
いわゆる「地域文化にかかわることわ
ざ」を景観と生活という視点と、平成2
3年の東日本大震災を受け、口承文化の
防災教育における重要性も視野に入れ
た教材開発を行うとともに授業実践を
行い、生活に密着した伝統文化を継承
する態度の育成を図る教育プログラム
を開発する。

3. 研究の方法

伝統文化にかかわる内容の中で、口
承（ことわざ・歳時記等）に焦点を当
てて、以下の内容で研究を進めた。

- ① これまでの口承を扱った授業実践の
収集と分析
- ② 長野県内に伝わる口承の収集
- ③ 各地域で伝えられている口承の教材
化
- ④ 開発教材による授業実践
- ⑤ 実践授業の分析に基づく指導の手
引の開発・作成

4. 研究成果

(1) アンケート結果から

口承文化が長野県内で実際の程度
学校教育の中で取り上げられているの
かを調べるために、長野県内の小中学
校にアンケートを依頼した結果、47
4名の先生から回答があった。

まず、口承文化については、小学校
で57.7%、中学校で76.6%の
教員が、「扱ったことがない」と回答し
ており、なかなか学校教育では扱われ
にくい状況がうかがえる。

逆に扱っているという回答の多くは、
地域に残る先人の気象に関する経験的
な知見である「観天望気」に関するも
のが多く、その他には地域の歴史や生
活にかかわる言い伝え等の「かるた」
づくり等も若干あった。

続いて、口承文化を扱っていないこ
との理由については、

- ① 地域に口承文化がない…1.3%
- ② 地域に学習で取り上げるような
口承文化がない…9.3%
- ③ 地域の口承文化について知らない…39.9%
- ④ あつかいたい調べ方がわから
ない…9.6%

- ⑤ 口承文化の教材開発をしている
余裕がない… 29.1%
- ⑥ あつまっている時間的な余裕が
ない… 25.9%
- ⑦ あつかい方がわからない…
12.7%
- ⑧ 口承文化をあつかう必要性を感じ
ない… 11.9%

と回答しており、教師自身が地域の実態をよく理解していないことが最大の理由となっている。

また、地域の実態を知らない理由については、全体の43.7%の先生が、勤務校が存する地域出身ではなく、3年程度で異動していく中、地域の文化等を知る機会がないということを挙げ、同時に、教材研究をしている時間がないや、学習として扱っている余裕がないということで、教師の側と子どもたちの側との両面から時間的な問題を挙げている教師が3割弱いる。

さらに、口承文化のあつかい方がわからない、あつかう必要性を感じないとする教師が両方とも、全体の1割程度おり、中でも必要を感じないとする教師の多くが小学校低学年の担任と中学校の社会以外の教科担任であった。

このことから、地域の素材を活用した教育実践の展開という観点からは、かなり離れた実態がうかがえる。

(2) 口承文化を教育にどう生かすか

口承文化には、農事暦としての「雪形」の活用や、「〇〇山に雪が三回降ったら里にも雪が降る」といった気象情報としての活用や、「春にがみ、夏は酸のもの秋は辛み、冬は油と心して食え」といった健康にかかわることわざや、「□□の川淵には〇〇がでる」といった危険を回避するための言い伝え等、

種々雑多な内容のものが多い。

そのようなものは古くからの言い伝えで、科学性が乏しいと一笑に付してしまえば、それまでであるが、実生活面でみると現代社会においても役立つ情報はかなりある。

それは、ある意味先人が失敗を繰り返す中で、積み上げてきた経験知が凝縮されているともいえる。

その意味で、口承文化を現実社会で生きていくための実学としての身につけていきたい知識や技能として、各教科や領域の学習の教材として活用していくべきものである。たとえば、雪形のような自然を活用した農事暦が、以前は日本各地に語り伝えられていたが、最近では農業に活用されるというよりは、観光の対象として語られることが多くなっている。科学的な気象データに、農業も頼ることが多くなっているが、気象庁の出すデータも確率は80%が限界といわれ、残りはこれまでの先人の知恵に頼るしかないのが実際である。

たとえば、海上保安庁の気象データでは、現在でも地域地域に残る先人の気象に関する経験的な知識である「観天望気」が活用されている。新学習指導要領では、小学校5年生理科の学習で、身近な気象を考えるきっかけとして、地域に残る気象にかかわる「いい伝え」を扱う教科書も出てきて、口承文化の扱いも扱われるようになってきたが、気象にかかわるものだけでなく、生活にかかわる内容については、もっと「いい伝え(口承文化)」を取り上げ、地域の特性を子どもたちが知る機会を学校教育としても保証していかなければ、先人たちが築き上げてきた地域の環境を反映した独特の文化が消えてい

ってしまうことになりかねないのである。

前述のアンケートでは、「〇〇山に黒い雲がかかると雨」という口承について、科学性がないから取り上げられないという回答が複数あったが、逆に、なぜそのようなことが語り伝えられているのか、科学的に解説できるか追究させることが、地域の素材の教材化であり、地域に根ざした教育実践になり、「生きる力」の育成につながるといえるのである。

このことは、平成23年の東日本大震災の後、防災教育についての関心が高まっているが、単に科学的な災害に関する知識を詰め込むことではなく、身の回りにある先人の知恵をこれからもどのように活用していけるかということ、実践的に学ぶことが、「釜石の軌跡」とよばれるような危機に直面した時のとっさの行動化につながると考えるのである。

(3) 教材開発に向けて

アンケート調査から、「教科学習等に位置づけられない」「口承文化を扱う必要性を感じない」としている教員が多く、学習内容の決定は、教員の研修や意思決定によるところが大きいという課題が明らかになった。

そこで、これまでの教育実践を行ったところ、社会科では地名や祭りにまつわる伝承が、国語では地域に残ることわざや昔話が、理科では観天望気などの気象にかかわることわざが取り上げられているが、長野県内でかつて語られていた農事にまつわる口承等については、ほとんど取り上げられていないということが明らかになった。

そこで、東日本大震災で「釜石の奇

跡」として再認識された「てんでこ」のように、先人の知恵をきちんと継承し、常に行動化できる姿勢を育成することが、防災教育視点から重要であることが指摘されていることから、口承が語る先人の知恵による「命を守る」一人一人の行動のあり方の育成を視点として、地域素材の教材化のための研修のあり方や複数の教科学習の関連性を意識した指導のあり方などを盛り込んだ教材開発を行った。

(4) 開発した教材

- ・「きょうどに伝わるねがい」（小学校第4学年社会）…先人が拓いた用水やため池にまつわる学習
- ・「郷土を拓く井水」（小学校第4学年社会）…先人が拓いた用水やため池にまつわる学習
- ・「災害の言い伝えをまとめよう」（小学校第4学年社会）…地域素材を教材化するための教師用研修テキスト
- ・「自然災害を防ぐ（天龍川の洪水）」（小学校第5学年社会・理科）…理科の学習と関連付けて、洪水等の災害を防ぐ先人の知恵を学ぶ学習
- ・「小森の石土手」（小学校第6学年社会）…江戸時代の普請の姿
- ・「善光寺大地震」（小学校第6学年社会）…江戸時代に起きた地震それに関連した鉄砲水の災害に関する学習
- ・「地域の神社が古事記に登場」（小学校第6学年社会）…諏訪大社（上社）にまつわる古代史に関する学習
- ・「諸藩の改革と幕藩体制の揺らぎ（八町銀山開発）」（中学校社会科）…江戸時代後期藩の財政立て直しのために展開された鉱山開発にかかわる学習

(5) 開発したデータベース

地域素材にかかわる情報を教員が共有できていないという実態から、地域素材を知る糸口となるデータベースを開発した。

このデータベースでは、素材の教材化の視点を明示することで授業改善に結びつけようと、現場の教員が発掘した地域素材や、教材化し授業実践したデータを登録してもらい仕組みを組み込んだ。

なお、教材データベースは、以下で公開した。

<http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/smap/modules/culture/>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 小山 茂喜, 「地域の文化を活用した環境教育～口承文化の活用を探る～」, 信州大学全学教育機構の「人文科学G.E.プロジェクト～「環境・人・生活」への人文科学的アプローチ～報告書」, 査読無, 2012, pp77-83

[その他]

ホームページ等

開発した教材等の公開

<http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/smap/modules/culture/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小山 茂喜 (KOYAMA SHIGEKI)
信州大学・全学教育機構・教授
研究者番号：10452145

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：